

## 調査研究

# 高校国語科 新学習指導要領における言語活動の充実

～伝え合う場の設定による思考力・判断力・表現力を高める授業展開～

長崎県教育センター

教科・経営研修課 高校教育研修班

畑野公昭

### 1 はじめに

高等学校の国語科では、平成25年度より年次進行で新学習指導要領が実施される。その大きな眼目は「言語活動の充実」である。「知識基盤社会」(図1)の到来により、生徒が身に付けるべき学力を従来とは異なった視点で見直しを図り、授業を改善する必要性に迫られている。グローバル化の進む国際社会、情報通信機器やインターネットの加速度的な発達、社会システムや思考の枠組みの大胆な見直しといった社会環境の目まぐるしい変化の中で、子どもたちはその変化に対応できる柔軟な思考力やその変化の是非を見分ける冷静な判断力、さらに社会で更新され続ける知識を常に学んでいく力が必要になってくる。また、ボーダレス化する社会で他者や異文化との協働が一層求められる環境の中では、子どもたちがコミュニケーション力を高めるとともに的確で説得力のある表現力を身に付けることが重要になる。そのような力をはぐくむためには、子ども自身が言語能力を高める学習活動を通して、思考力・判断力・表現力等の学力を培う必要がある。

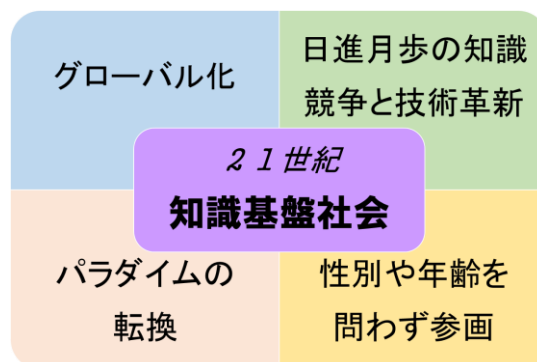


図1 「知識基盤社会」のキーワード(「中教審幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)文部科学省 2008」をもとに作成)

その時代の要請に対して、高等学校の国語科ではどのような取組が必要だろうか。教育には「不易」の部分と「流行」の部分があるが、その「流行」の部分に柔軟に対処していくことが求められている。まずは、高校の国語の授業で「言語活動」をいかに導入するかが当面する大きな課題である。まだ先行事例は少なく、最初からうまくいくとは限らないが、できるところから徐々に取り組み、実践の中で効果を確かめながら授業改善を進めていくしかない。その一助として本稿を参考にしていただけると幸いである。

## 2 新学習指導要領における言語活動とは

### (1) 言語活動の充実の設定の経緯

「言語活動の充実」は、もともとは「国語力の育成」が出発点になっている。まず平成16年2月の文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」において、「学校教育においては、国語科はもとより、各教科その他の教育活動全体の中で、適切かつ効果的な国語の教育が行われる必要がある」と指摘され、平成17年の2月に文部科学大臣による中央教育審議会への審議要請で、「国語力」は「すべての教科の基本」と位置付けられた。平成18年2月の中教審教育課程部会の「審議経過報告」でも「国語力の育成」が中核に位置付けられていた。

だが、平成19年8月の言語力育成協力者会議の「言語力の育成方策について（報告書案）」において、「言語力」が「知識と経験、論理的思考、感性・情緒等を基礎として、自らの考えを深め、他者とコミュニケーションを行うために言語を運用するのに必要な力」と示され、「言語力の育成」が学習指導要領を見直す際の留意事項として中教審に提言された。それを受ける形で平成20年1月の中教審答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校の学習指導要領等の改善について」（以下「中教審答申」）において、「言語活動の充実」が「今回の学習指導要領の改訂において各教科等を貫く重要な改善の視点」として位置付けられるに至った。

この中教審答申では、「国語をはじめとする言語」が「知的活動（論理や思考）」だけではなく、「コミュニケーションや感性・情緒の基盤」とされ、国語科に対して「言語の教育としての立場を一層重視」することや、「実生活で生きてはたらき、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力」を身に付けること等に重点を置いて内容の改善を図ることが求められた。

これらの一連の動きを見ると、「国語力」が子どもたちにとって身に付けるべき重要な力であることが認識される中で、「国語」という教科の枠を超えて全ての教科で「言語」を意識した取組を共通して行うために「言語活動」というプラットフォームが設定されたことが分かる。その際、各教科等は「国語科で培った能力を基本に」して、「それぞれの教科等の知識・技能を活用する学習活動を充実することが重要」とされ、また、各学校において教育課程全体における国語科の役割の明確化やそれを受けた国語科の授業改善が強く期待されるようになった。国語科に課せられている教育的な使命は、もはや一教科の枠にとどまるものではなく、「生きる力」をはぐくむ上で最も基盤となる力を身に付けさせることに広がっている。したがって、国語科の教科指導の在り方は、根本から見直すべき重要なターニングポイントに差ししかかっているとと言える。

## (2) 言語活動の充実が設定された背景

「言語活動の充実」は平成20年度中教審答申の「7. 教科内容に関する主な改善事項」の第一に挙げられている。ここまで言語活動が重視されるのは、時代の要請や教育基本法・学校教育法等の法令の改正を踏まえていることもあるが、何より子どもたちの学力や学習状況を巡る現状と課題への強い危機感があった。中教審答申では、「教育課程実施状況調査」(平成17年実施)「PISA調査(生徒の学習到達度評価)」(平成15年、平成18年実施)「TIMSS(国際数学・理科教育動向調査)」(平成15年実施)「全国学力・学習状況調査」(平成19年実施)等の結果から、子どもたちの学力を次のように総括している。

基礎的・基本的な知識・技能の習得については、(中略)全体としては一定の成果が認められる。しかし、思考力・判断力・表現力を問う読解力や記述式の問題に課題がある。

また、「子どもの心と体の状況」について、内閣府「低年齢の少年の生活意識に関する調査報告書」(表1)より、以前と比べて、学習や将来の生活に対して、無気力であったり、不安を感じたりしている子どもが増加するとともに、友達や仲間のことで悩む子どもが増えるなど人間関係の形成が困難かつ不得手になっていると分析している。

	H 7.11	H19. 2	差
勉強や進学について悩みや心配事がある(中学生)	46.7%	61.2%	+14.5%
友達や仲間のことで悩みや心配事がある(中学生)	8.1%	20.0%	+11.9%

表1 中学生の心配事(「低年齢の少年の生活と意識に関する調査報告書(内閣府)2007」をもとに作成)

そこで、中教審答申では、子どもたちがこの課題を乗り越え「生きる力」をはぐくむために、5. 学習指導要領改訂の基本的な考え方(2)「生きる力」という理念の共有において、次のような点を重視すべきこととして示した。

- ・ 思考力、判断力、表現力等をはぐくむためには、各教科において、基礎的・基本的な知識・技能をしっかりと習得させるとともに観察・実験やレポートの作成、論述といった知識・技能を活用する学習活動を行う必要がある。
- ・ コミュニケーションや感性・情緒、知的活動の基盤である国語をはじめとした言語の能力の重視や体験活動の充実を図ることにより、子どもたちに、他者、社会、自然・環境とのかかわりの中で、これらと共に生きる自分への自信をもたせる必要がある。

ここで示された方向性が「言語活動の充実」の基盤となっている。教師は、言語活動が、「思考力、判断力、表現力等をはぐくむ」ため、また「子どもたちに、他者、社会、自然・環境とのかかわりの中で、これらと共に生きる自分への自信をもたせる」ために行われる学習活動であるということを十分に認識しておく必要がある。

### (3) 言語活動の位置付け

言語活動そのものは、平成11年に改定された学習指導要領でも取り上げられている。この時は、国語の各科目の「内容の取扱い」の中で、実践的な指導が充実されるように「言語活動例」として示されていたが、平成21年度の改定では、「言語活動例」が各科目及び領域の内容の(2)に配置され、(1)に示された「指導事項」を「言語活動例」を通して指導することが明確化された。

「言語活動の充実を図る全体計画と授業の工夫」(独立行政法人教員研修センター2010)では、「言語活動を通して指導事項を指導する」という枠組みを意識する必要性をあげるとともに、「活動あって指導なし」の状況に陥ることのないように注意を喚起し、授業で取り上げる言語活動が「どのような力を身に付けるために行うのか」という意識を持つ必要性を述べている。また、言語活動は中学校までに「既に指導(学習)している事項」であり「目標の実現に資するものという位置付け」であるため、「全員について評価しなくてもよい」としている。つまり、言語活動は「指導の手立て(ツール)」であるという捉え方である。評価規準を設け、生徒全員について評価するのは、基本的に「指導事項」に該当するものであって、言語活動をする能力を育成することが指導の主目的ではないということを念頭において単元計画や授業計画を立てる必要がある。

なお、その単元計画を立てるプロセスとしては、

- ① 当該単元で身に付けさせたい言語能力を設定する。(新学習指導要領の内容(1)に示す指導事項から取り上げる。)
- ② 取り上げた言語能力を身に付けさせるのにふさわしい言語活動を設定する。
- ③ 設定した目標や取り上げた言語活動にふさわしい教材を選定する。

と示され、すべての生徒について実現状況の評価するのは内容(1)についてであり、内容(2)の言語活動は、内容(1)の実現、習得に資するものという位置付けがなされた。

これまでも教科書の選定や年間の授業計画は各学校の実情に合わせて行われてきた。ところが、今回の改訂では、各科目で示された指導事項が単元で習得すべき学習目標や評価規準になるものとして標準化された。また、従来ありがちだった単に教科書の教材の配列順に年間の単元計画・授業計画を立てるのではなく、教師自身が学校や生徒の実情に応じて身に付けるべき言語能力の優先順位を見極めて単元の系統性を整え、その単元ごとに多様な言語活動の中から効果的なものを選択・配置し、系統的・段階的に高めていく言語能力やそこで用いられる言語活動に適した教材を選定するといった、より主体的・能動的な取組が求められている。また、その系統的・段階的な計画を立てる際は、中学校までの既習事項を踏まえつつ高校3年間を見通した計画を立てることが大切であり、その際に教科担当者間の十分な連携や共通理解が欠かせないことは言うまでもない。

#### (4) 言語活動の目的・ねらい

言語活動の目的・ねらいは、それ自体の能力を高めることではなく、言語活動を通してどのような力を高めるのかにある。平成19年に改正された学校教育法第30条2で示された学力の重要な要素は、①基礎的・基本的な知識・技能、②思考力・判断力・表現力等、③学習意欲であるが、平成20年の中教審答申では、諸調査による児童生徒の学力・学習状況の実態に基づき、特に②の

思考力・判断力・表現力等を確実にはぐくむ

ために言語活動を充実させることを取り上げている。

また、国語科においては、「言語の教育としての立場を一層重視」し、「実生活で生きてはたらし、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けること」等に重点を置いて内容の改善を図り、

- ・言葉を通して的確に理解し、論理的に思考し表現する能力、互いの立場や考えを尊重して伝え合う能力を育成する
- ・我が国の言語文化に触れて感性や情緒をはぐくむ

ことを重視することを求めている。

したがって、授業で言語活動を設定する際は、①論理的思考力・表現力、②伝え合う力、③感性や情緒をはぐくむものとなり得るように工夫することが重要である。特に、「伝え合う場」を効果的に取り入れた授業は、「伝え合う能力」を高めることのみならず、子どもたちに学ぶことの意味を実感させ、子どもたちの主体性や能動性を引き出すとともに学習意欲を高める契機となる。また、言語活動を取り入れた学習においては、子どもたちに乏しいとされる「自分や他者の感情や思いを表現したり、受け止めたりする語彙や表現力」を身に付けさせて、「他者、社会、自然・環境とのかかわりの中で、これらと共に生きる自分への自信」をもたせることや、「自己と対話を重ね自分自身を深めつつ、他者、社会、自然・環境とのかかわりの中で生きているという自制を伴った『開かれた個』」をはぐくむことが重視されていることも踏まえる必要がある。

#### (5) 言語活動の内容

「言語活動」が具体的にどのような活動を指すのか、いくつかの視点から捉える必要がある。平成20年の中教審答申では、「言語活動」を、

記録、要約、説明、論述といった学習活動

として示し、「思考力・判断力・表現力等をはぐくむ」ための学習活動として、

- ① 体験から感じ取ったことを表現する
- ② 事実を正確に理解し伝達する
- ③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする
- ④ 情報を分析・評価し、論述する
- ⑤ 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する
- ⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる

とまとめている。

また、平成24年6月に文部科学省より示された「言語活動の充実に関する指導事例集【高等学校版】」（以下「指導事例集」）では、言語活動を言語の役割を踏まえ、次のように分類している。

- (1) 知的活動（論理や思考）に関すること
  - ア 事実等を正確に理解し、他者に的確に分かりやすく伝えること
  - イ 事実等を解釈し説明するとともに、自分の考えを持つこと、さらに互いの考えを伝え合うことで、自分の考えや手段の考えを発展させること
- (2) コミュニケーションや感性・情緒に関すること
  - ア 互いの存在についての理解を深め、尊重すること
  - イ 感じたことを言葉にしたり、それらの言葉で互いに伝え合ったりすること

ここでは、言語活動が「知的活動（論理や思考）」と「感性・情緒」の二つの面への働きかけを求めていることに留意すべきである。中長期的な学習計画を立てる上では、この二つをバランスよく配置することが、トータルな人間形成＝「生きる力」をはぐくむことにつながるのである。

国語科においては、これら二つの面を「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の指導を通して身に付けさせていく上で、言語活動の具体的な方法や内容、特質を十分に知っておく必要がある。そこで、言語活動の方法や内容等について、中学校、高校の学習指導要領や教科書に挙げられているものを中心に**表2**に整理した。

一通り「話す・聞く」「読む」「書く」「基礎的・基本的事項」の領域別に個々の言語活動を整理したが、それぞれの言語活動は、異なった領域の力を伸ばすために設定される場合もある。例えば、作品の感想を書くことは、「相手や目的に応じて題材を選び、文章の形態や文体、語句などを工夫して書く」といった目標であれば、「書くこと」の領域に当たるが、「文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わう」という目標を実現するための方法であれば「読むこと」の中に取り込まれる。また、「書く言語活動」が「話す力・聞く力」を高めるための素材を提供する場合もある。

なお、音読、朗読、暗唱については、国語総合で「読み深めるため」と「読むこと」の領域として示されており（学習指導要領解説国語編 国語総合 4 内容の取扱い(4)イ)、古典A、古典Bでも同様の取扱が示されている。したがって、音読等の活動に際しては、単に音声に出して他者に伝えるだけにとどまらない指導上の工夫が必要だろう。

主に話す・聞く言語活動	発表、報告、討論、説明、表明、話し合い、インタビュー、シンポジウム、スピーチ、ディスカッション、ディベート、パネルディスカッション、バズセッション、プレゼンテーション、ブレインストーミング、ポスターセッション 等
主に書く言語活動	<形式> 短作文、長作文、レポート、記述解答、マッピング、フローチャート、図式、メモ 等 <内容> 感想文、随筆、創作（小説・物語・詩歌）、批評文、鑑賞文、戯曲・脚本、説明文・意見文、論文（小論文）、案内文・報告文、手紙・通知、書評、新聞記事、広告カード、パンフレット、要約文、詳述文 等
主に読む言語活動	音読、朗読、斉読、群読、黙読、作業読み、暗唱、読み比べ、メディア情報の読み取り、論理構成の分析、思想や感情の把握 等
基礎的・基本的事項に関する言語活動	漢字の書取りや読みの習得、語句の意味の調査、視写、聴写、文語や訓読のきまりの理解 等

表2 言語活動の方法や内容等

### 3 言語活動の進め方

#### (1) 言語活動を進める上で踏まえておくこと

言語活動を進める際、これまでの授業の在り方に対する次のような反省を踏まえておく必要がある。

中学校及び高等学校では、ともすると「トーク」と「チョーク」と「ワークシート」による学習というような、教師が知識の伝達のみを行う教師主導の授業が行われている状況がいまだにある。これからの時代には、生徒が授業の中で主体的に問題解決を図ったり、思考活動を行ったりする授業が求められる。

（「言語活動の充実を図る全体計画と授業の工夫」 教員研修センター 2010）

特に高校の国語では、授業を進める際、一問一答のやり取りと教師の説明を中心とした講義形式の授業スタイルが多く見られる。むろん教材となる文章のレベルは高くなり、書かれている内容を丁寧に読み解いていく過程で教師の的確な説明は不可欠である。しかし、「教える」ことに比重がかかりすぎて生徒自身が「学ぶ」時間となり得ているか、授業の核心を教師が説明して一方的な教え込みで終わったり、生徒の学習意欲を削ぐものとなったりしていないか、今一度指導の在り方を見直す必要がある。

また、中教審答申では、子どもたちの発達段階を踏まえた指導に際して、

小学校においては日常生活に必要な国語の能力の基礎を、中学校においては社会生活に必要な国語の能力の基礎を、高等学校においては社会人として必要な国語の能力の基礎をそれぞれ確実に育成するようにする。

と示している。すなわち高校では「社会人」として通用する、高度で実践的な国語の能力の育成が期待されている。

しかし、高校では中学校よりも言語活動の幅が狭い傾向にある。例えば、平成23年度に当教育センターで実施した調査研究『書くこと』を中心とした言語活動における中高の国語科教員へのアンケート調査によると、高校での「書くこと」に関する言語活動としては、「感想文」、「論文（小論文）」、「要約文」「詳述文」に偏り、他のジャンルへの取組は消極的な傾向がある。中学校では詩や小説の「創作」や「鑑賞文」、「手紙や通知文」等にも積極的に取り組んでいるが、高校でそのような言語活動を発展的に取り組ませる実践にはつながっていない。

文部科学省から出されている言語活動のリーフレットには、何も特異な例が示されているわけではない。むしろ、できる範囲で従来の授業形式の改善を試み、授業の活性化を図ろうとするものである。（図2）したがって高校における言語活動は、従来の教科指導の在り方を基盤に置きながら、社会における実践的な場面に即した言語活動ができるところから取り入れ、広げていくことを念頭に置いて取り組んでいく必要がある。

発表の場面で	書く場面で	考えを深める 場面で
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 先生が説明するだけでなく...</li> </ul> <p style="text-align: center;">↓</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 生徒が説明する</li> <li>• 製作物を使って発表する</li> <li>• 立場を決めて討論する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 板書をノートに写すだけでなく...</li> </ul> <p style="text-align: center;">↓</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• レポートにまとめる</li> <li>• 新聞にまとめる</li> <li>• ICTを活用する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 一斉授業だけでなく...</li> </ul> <p style="text-align: center;">↓</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ペアで意見を交換する</li> <li>• 付箋を使って話し合う</li> <li>• ホワイトボードを使って話し合う</li> </ul>

図2 「例えばこんな言語活動で授業改善」（文科省リーフレットをもとに作成）

## （2）学校全体の言語活動の計画

「言語活動の充実を図る全体計画と授業の工夫」（独立行政法人教員研修センター2010）では、各教科等の言語活動を充実する上で「国語科で培った能力を基本に」することが中教審答申で示されたことを受けて、「教育課程全体における国語科の役割の明確化」と「国語科の授業改善」が期待されていることが指摘され、言語活動を「国語科をはじめ学校全体で、カリキュラム・マネジメントの視点に立った教育課程」の中に据えるよう求められた。また、言語活動の充実のために、



- ・ 学校の教育活動全体で組織的・計画的に行うこと
- ・ 児童生徒の実態、発達の段階に応じて行うこと

が必要なこととして示されている。

したがって、国語科として身に付けさせたい言語能力や言語活動を設定する際に、学校全体における言語能力の育成や言語活動の在り方との関連を図りつつ、他教科や総合的な学習の時間等と連携することが求められよう。その際、単年度のみならず、3年間を見通して身に付けさせたい言語能力と、その能力を高めるのにふさわしい言語活動について総合的に計画することが重要である。また、言語活動に関わる情報の交換や共有、取組の調整を図る場の設定が様々なレベルで必要である。(図3参照)

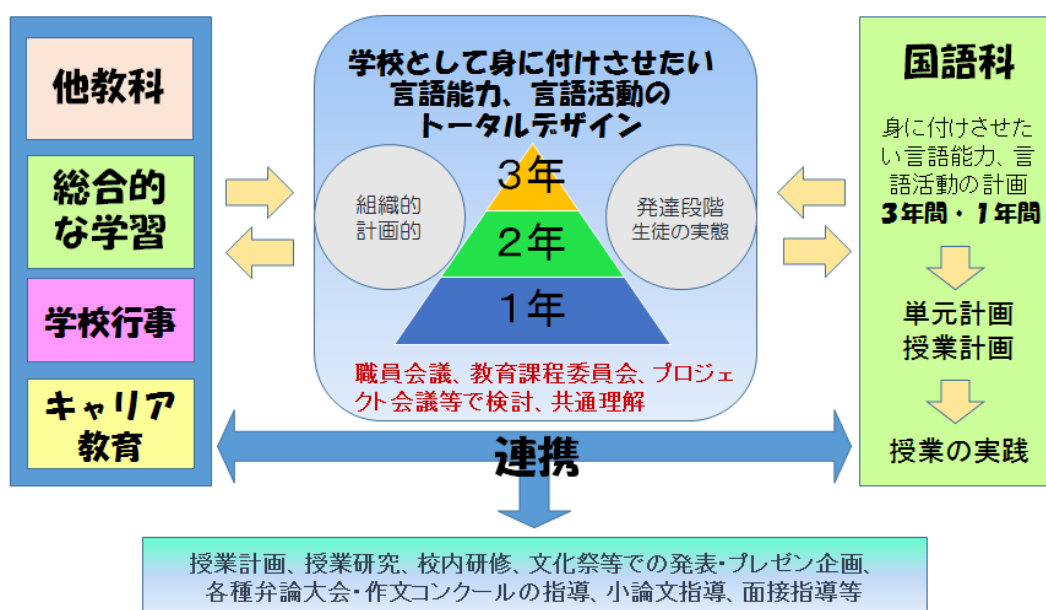


図3 学校における言語活動の連携モデル

### (3) 言語活動を進める具体的な手順・方法

#### ① 単元の目標を実現するのにふさわしい言語活動を設定する

言語活動は、各科目の学習指導要領で示されている指導事項に沿って設定した単元の目標を実現するのにふさわしい方法・内容のものを設定する必要がある。例えば、文部科学省では表3のような言語活動の指導事例を示している。

ここでは、社会人となっても活用できる、多様で実践的な指導事例が示されている。単元の目標を実現するのにふさわしい言語活動の設定は、教師自身の創意工夫によるところが大きい。社会における日常的なコミュニケーションの場面、様々なメディアを活用した情報伝達・情報交換の場面、特別な立場や人間関係を想定した場面等を設定したり、P7の表2にあるような言語活動の方法や内容を効果的に取り入れたりすることを通して、生徒の関心・意欲を高め、学びの実感をもたせることができるような言語活動の工夫を期待したい。

	単元の目標	言語活動
国語総合 (小説)	文章の内容や形態に応じた表現の特色に注意して読む。(読む能力)	小説の設定を変えて書き換えること。ポップ(広告)を作ること。
国語総合 (古典)	文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図を捉えたりする。(読む能力)	古典を脚本に書き換えること。
国語総合 (古典)	文章の内容を必要に応じて要約したり詳述したりする。(読む能力)	漢文に書かれている情報を取捨選択して、新聞の形式でまとめること。
国語表現	話題や題材に応じて情報を収集し、分析して、自分の考えをまとめたり深めたりする。(書く能力)	相手や目的に応じて、報告のための文章をまとめること。
現代文A	言語文化についての課題を設定し、様々な文章を読んで探究する。(読む能力)	「恋愛と友情の狭間」をテーマにして文章を読み比べ、批評文を書くこと。
現代文B	目的や課題に応じて、収集した様々な情報を分析、整理して資料を作成し、自分の考えを効果的に表現する。(書く能力)	ICTを用いて発表用資料を作成すること。
古典A	古典の和歌の調子を味わう。(読む能力)	百人一首カルタ(百人一首クイズを含む)をすること。
古典B	古典を読んで、人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確に捉え、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにする。(読む能力)	源氏物語の複数の現代語訳を読み比べ、それぞれの共通点や相違点、書き手の源氏物語の読み方の特徴についてまとめ、説明したり、話し合ったりすること。

表3 指導事例一覧(「言語活動の充実に関する指導事例集」文部科学省2012をもとに作成)

## ② 言語活動の具体的なプロセスを構築する

言語活動は、それ自体が目的ではなく、基本的には「思考力・判断力・表現力等を確実に高める」ことや「伝え合う力を高める」ためのツールとしての性格を帯びている。したがって、言語活動を取り入れるに当たって、どのような力や態度を高めるための活動なのか、よく検討する必要がある。

一見すると活発な言語活動のように見えても、その内実が十分でない場合がある。表面的な言語活動の動きに満足して、深く思考する力を育てる場になり得ていなかったり、「活動あって指導なし」の状態が生まれたりする可能性もある。

したがって、言語活動を授業の中に仕組んでいく際には、まず、そのねらいを明確にし、そのねらいに対して言語活動の方法、内容、時間、人数等が妥当であるかを十分に検討し、言語活動の質や内容が充実するように学習活動や指導のプロセスを構築する必要がある。

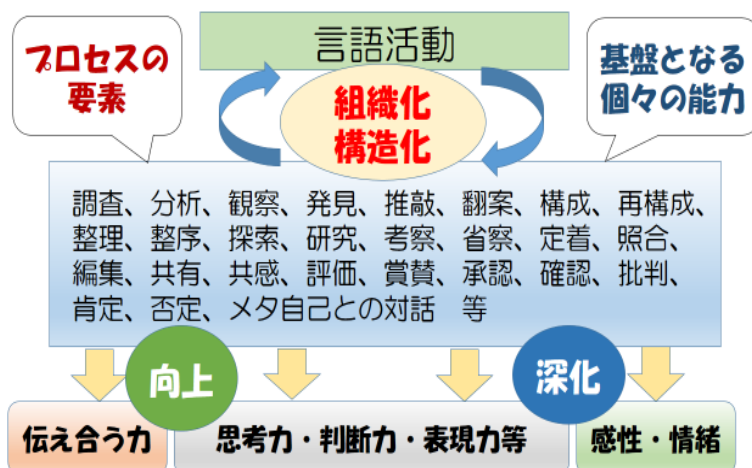


図4 言語活動を仕組むプロセスの概念図

その際、単元の目標を実現する上で、具体的にどのような作業プロセスや基盤となる能力等の育成を通して言語活動の組織化、構造化を図るかが、言語活動を表面的なもので終わらせないためには重要である。(図4参照)

言語活動をプロセス化する中で、基盤となる個々の能力等として、

調査、分析、観察、発見、推敲、翻案、構成、再構成、整理、整序、探索、研究、考察、省察、定着、照合、編集、共有、共感、評価、賞賛、承認、確認、批判、肯定、否定 メタ自己との対話 等

を挙げることができる。主にどのような能力の育成を通して、「伝え合う力」や「思考力・判断力・表現力等」や「感性・情緒」を高めるかについて、単元計画や授業計画を立てる際に、十分練っておく必要がある。その際、基盤となる能力のどれに焦点を当てるか、またどのように組合せてどのような順序で組織化するかについては、単元の目標や生徒の実態に応じて、様々な工夫が考えられる。

以上を踏まえて、従来型の授業と言語活動型の授業の具体的な展開例(図5)を比較してみた。図5では、ペア学習を中心とした言語活動による授業展開を具体例として挙げたが、生徒個々の主体的な参加による学びのプロセスは、従来型の授業に比べてより密度の高いものとなりそうである。

また、P7の表2に見られる言語活動のバリエーションと図4の基盤となる能力等との組み合わせ方には無限の可能性があり、発達段階や生徒の実態等を踏まえて、どのような組み合わせを選択し計画化するかは教師の手に委ねられている。特に言語活動を通して育成が求められている「論理的思考力・表現力」については、分析力や構成力を中心にどのようなプロセスを経てその力を高めていくかが工夫のしどころである。

科目：国語総合		教材：「水の東西」山崎正和	
発問：『鹿おどし』は、日本人が水を鑑賞する行為の極致を表す仕掛けだと言えるかもしれない。」と筆者が言うのはなぜか、本文の内容をもとにまとめよう。			
従来型		言語活動型1	
<p>1 個々の生徒が授業時間内にノートにまとめる。</p> <p>2 数名の生徒に発表させ、教師がコメントする。</p> <p>★表明は数名。照合や分析は間接的で、取組に個人差が生じやすい。</p> <p>3 教師が示した模範文例を生徒が書き写す。</p> <p>★生徒は受身的。模範文例との照合で作業が終わり、まとめるプロセス段階での省察が不十分になりがち。論理的思考力や表現力の育成との接点が見えにくい。</p>		<p>1 個々の生徒が家庭学習としてノートにまとめてくる。</p> <p>☆言語活動の時間を授業内に確保するためには、効率的な授業計画や家庭学習との連携を工夫する必要がある。</p> <p>2 ペア・グループ学習で相互に見せ合い、相違点や改善点を指摘し合って、各自が補足、修正を図る。</p> <p>☆次のような活動の指示を出す。かける時間を明示する。</p> <p>表明 考えを伝え合う 比較 相違点を確認する 分析 違いの理由を考える 評価 妥当性を論理的に判断する 再構成 改善を図る</p>	
言語活動型2		言語活動型1	
<p>(右の言語活動型とは別の流れ)</p> <p>1 個々の生徒がノートにまとめる。</p> <p>2 個々の生徒の意見を発表させたり板書させたりして全体で共有する。</p> <p>☆実物投影机やタブレット等のICT機器を活用した効率的な授業を運営して、言語活動の時間の確保や質の向上等の工夫を試みることができる。</p> <p>3 共有したものに対して、ペア・グループ学習で、課題や改善点を検討する。</p> <p>☆比較、分析、評価、再構成等の観点。</p> <p>4 ペア・グループ学習で検討したことをもとに、個々の生徒がまとめ直す。</p> <p>5 まとめ直したものを教師が回収し、点検したり、添削したりする。</p> <p>☆言語活動による目標の達成状況を評価する材料とすることができる。</p> <p>6 次時に回収したものを返却するとともによい文例を紹介したり、ポイントの確認を行ったりして、検証を図る。</p>		<p>3 教師が、生徒の文例をもとに良い点や補足すべきことを挙手で確認したり、生徒に発言させたりしつつ共有を図り、ファシリテーション的な手法でまとめていく。</p> <p>☆生徒の自発性や当事者意識を引き出しつつ、協働してよりよい成果を生み出す表現活動を進める。教師自身の対話力や多様な授業展開への準備も必要となる。</p> <p>☆まとめの過程では、</p> <p>①『鹿おどし』の仕掛けの特徴 ②日本人の水を鑑賞する行為の特質 ③西洋人の水を鑑賞する行為の特質 ④①～③を論理的に結び付けた「極致を表す」と言える理由 といったポイントの到達度を検証する。</p> <p>4 自己評価を行う。</p> <p>☆以下の点を振り返り、省察する。</p> <p>①本文における筆者の論理性 ②学習者の思考プロセスにおける論理性 ③学習者がまとめた内容の妥当性</p>	

図5 従来型と言語活動型の具体的な授業展開例

言語活動と基盤となる能力等の選択や組み合わせ方は、身に付けさせたい言語能力等によって異なる。例えば、同じペア学習による話し合いでも、互いの意見や考えを「表明」し、「共有」する設定であれば「伝え合う力を高める」ための言語活動となり、「批評」し合って「考察」を深め、「再構成」につなげる設定であれば「思考力・判断力・表現力等を高める」ことを目標とする言語活動となる。言語活動とその言語活動を通して身に付けさせたい言語能力等との間に、どのようなプロセスを仕組んでいくのかを教師は常に意識する必要がある。

さらに、言語活動を通して基盤とする個々の能力の到達度をどこに設定するかが重要である。その設定の度合いによって指導や学習活動の内容や質が異なってくる。そこを曖昧にすることなく、生徒に具体的に明示することができれば、言語活動の意味はより明確になる。また、言語活動を効果的に進める上で、教材、補助教材、ワークシート、機材、用具等の具体的な活用法についても、併せて考えておく必要がある。

### ③ 言語活動の実質を高める指導を行う

言語活動の計画は綿密に立てられているが、実際は生徒の活動が期待したとおりに実現できないこともある。生徒の話し合いが停滞する、議論が深まらない、成果物が表面的に終わる等、十分な基盤づくりや適切な指導や配慮が不足すると言語活動は不十分な取組に終わってしまう可能性がある。したがって、そのリスクを乗り越えて効果的な言語活動を取り入れた授業を実践するためには、「協働性」を高める次のような指導が必要である。

#### ア 生徒が言語活動に協働して取り組みやすい環境をつくる

- ・ 表現の場面で、考えたことや思ったことについて、互いに気がねすることなく述べ合い、相互に認め合うことや気付き合うことの大切さについて全体指導を加える。
- ・ 音読や斉読の場面で、全員がしっかりと声を出すような指導を行い、協働で取り組む言語活動にスムーズに入っていける下地をつくる。
- ・ 生徒が表現面で努力したことや良かった点について適切に評価したり、表現活動への感謝やねぎらいの言葉をかけたりして、表現することに肯定的な授業の雰囲気をつくる。
- ・ 表現することの意味を他者とのかかわりの中で味わわせ、表現することへの意欲を高めるために、伝え合う場を授業の中で適切に設定する。
- ・ ペア学習やグループ学習を進める際に、机や椅子の配置、話し合う手順や内容、役割分担、話し合った後の作業等を明確に指示して、言語活動がスムーズに進むように支援する。

#### イ 生徒が十分に力を出し、集中して言語活動に取り組めるように働きかける

- ・ 発達段階や生徒の実態に応じた言語活動の実現状況を適切に想定し、生徒が意欲的・主体的に取り組めるような目標を提示する。
- ・ 生徒の言語活動状況を見守りながら、言語活動の実現状況と照らし合わせた課題を適切に見極め、その課題を生徒と共有しつつ、解決に向けた指導を段階的に粘り強く加える。
- ・ 言語活動に取り組む時間や文字数について、生徒に一定の負荷がかかるように設定するなど、集中力を高める工夫をする。

充実した言語活動を行うためには、生徒が安心して表現できる場をつくることと、言語活動が学力の向上や感性の深化等につながる効果的な働きかけを教師が並行して行うことが重要である。以上のような取組は、教科担当者が行うことはもちろんだが、生徒の良好な人間関係は言語活動を充実する上での基盤であり、学級担任や他教科の担当者、学校カウンセラーとも密接な連携を図ることが大切である。

#### ④ 言語活動で得られた成果を適切に評価する

言語活動そのものは、「目標の実現に資するもの」という位置付けであることから、「評価として必ずしも記録に残す必要はない」「全員について評価しなくてもよい」とされている。（「言語活動の充実を図る全体計画と授業の工夫」（独立行政法人教員研修センター 2010））したがって、「言語活動を通して指導事項を指導する」という考え方からすると、評価の対象は、基本的に学習指導要領の指導事項をもとに設定した単元の目標に対する実現状況であり、その判断は、教材を踏まえて具体的に設定された評価規準による。

ただ、言語活動そのものは評価の対象外であるとしても、言語活動が効果的に行われたか否かが目標の実現状況に深く関わるのであって、言語活動が身に付けさせたい力に収斂していくような授業づくりとその授業における適切な到達度を示した評価規準を設定することが重要である。

評価方法については、「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（高等学校 国語）」（国立教育政策研究所 教育課程センター 2012）において、

観察、生徒との対話、ノート、ワークシート、学習カード、作品、レポート、ペーパーテスト、質問紙、面接などの様々な評価方法の中から、その場面における生徒の学習状況を的確に評価できる方法を選択していくことが必要である。

と示されている。したがって、言語活動自体は評価の対象とならないにしても、言語活動のプロセスにおいて、単元で設定した「関心・意欲・態度」「話す・聞く能力」「書く能力」「読む能力」「知識・理解」の目標に対する実現状況を上記のような方法できめ細かく確認して指導につなげるとともに、評価の材料を集め、最終的な成果物と合わせて総合的かつ適切に評価できるように工夫することが大切である。

#### (4) 言語活動を進めるポイント

言語活動の充実のポイントは、言語活動そのものの活性化と言語活動によって付けた力の深化にある。田中宏幸氏は、そのポイントを生徒と教師それぞれの活動に焦点を当てて、次のようにまとめている。

##### 【生徒の活動で大事なこと】

- ① 課題意識・問題意識をもち、自分の仮説を立てること
- ② 課題解決の方法を決め、探究してみることに
- ③ 発見内容を他者に伝えるために言語化すること
- ④ 他者との交流を生かすこと
- ⑤ 学習を振り返り、自己肯定感とともに次の課題を発見すること
- ⑥ 家庭学習への意欲を高めること

##### 【教師の活動で大事なこと】

- ① 習得させたい「知識・技能・用語・理念」等を明確にすること
- ② 「場」の設定を工夫し「発問」の質を改善すること
- ③ 個々の生徒が思考を深める時間を保障すること
- ④ 話し合いが深まる班活動の進め方を開発すること
- ⑤ 探究成果を言語化する様式を具体化し、活用できるようにすること
- ⑥ 自己評価・相互評価・教師の講評などを効果的に組み合わせ、到達点と今後の課題を明確にしていくこと

「中学校・高等学校 言語活動を軸とした国語授業の改革10のキーワード」

田中宏幸・大滝一登編著（三省堂 2012）

以上のポイントは言語活動を進める際の基本として、教師が常に念頭に置いておくべきであろう。言語活動が、生徒の主体的な学びの態度を育成し、他者との交流や学びの深化を通して学習意欲を高め、身に付けるべき力の向上に資するものとなっているかを検証しつつ、学びの場の設定と指導法に工夫を重ねる不断の努力が教師には必要である。

言語活動は、ややもすると、その円滑さを目指すあまり、「考える」「悩む」「迷う」場面がカットされ、表面的には活発に見えても、既に跳べるハードルを繰り返し跳ぶような学びの実質が伴わない活動になる場合も考えられる。したがって、教師は生徒の実態を見極めながら、ハードルの高さを適切に設定し、時にはあえて考え込む、逡巡するといった時間を織り込みつつ、その中から新たなものの見方や考え方を生み出すことができるように学習プロセスを仕組むことが重要である。

また、プレゼンテーションを伴う取組では、資料のデザインやレイアウト、発表形式ばかりに生徒の関心が向いてしまい、肝心の内容に深まりが見られないことがある。生徒は一通りの言語活動を中学校までに体験してきており、高等学校ではその上に立った授業づくりを必要とする。小中学校の教科書を参照する、小中学校の言語活動を取り入れた授業を参観する、中学校までの言語活動について生徒から聞き取りを行う等、中学

校までの言語活動の取組状況を把握した上で、高校で行うべき言語活動として適切な方法や内容を設定し、それに見合う取組を生徒に指導する必要がある。

さらに、言語活動においては、指導の焦点を絞っておかなければ多くの生徒の動きを掌握し、具体的な指導を加えて生徒の学びを促進することはできない。例えば、ワークシートや短作文、レポートにコメントを入れ返却をする際に、多くの要素を持ち込みすぎると、処理に時間がかかりすぎて指導のタイミングを逃すことになる。また、生徒は何を改善していけばよいか分かりにくくなる。主なコメントは論理構成面に絞るなど簡潔化し、それをフィードバックして次の学習活動に反映させるといった指導の連続性、継続性を重視した指導が効果的であろう。

以上から、高等学校における言語活動のポイントは、

- ・ 中学校までの言語活動の取組を知ること
- ・ 高等学校として取り組むべき適切な言語活動を設定すること
- ・ 言語活動に学びの実質を伴わせること
- ・ 言語活動を通じた学習への指導や評価のポイントを絞ること
- ・ 言語活動を通じた学習への指導の連続性、継続性を確保すること

とまとめることができる。高等学校としての言語活動について、教科担当者が創意工夫を重ね、実際の社会生活でも活用できる優れた実践が出てくることを期待したい。

#### 4 伝え合う場の設定を生かした言語活動の在り方

##### (1) 伝え合う場のもつ働き

情報化やグローバル化が進み、異文化社会や他者との共存が求められる時代にあって、単に自己の立場を一方的に主張したり無条件に受容したりするだけでは、相互理解を進めつつ発展的・建設的に

物事を進めていくことはできない。学習指導要領で重視される「伝え合う力」は、これからの社会をよりよく生きていく上で不可欠な力である。「伝え合う力」を高めるためには、「伝え合う場」の設定が必要である。「伝え合う場」では、「話し合う、聞き合う、書き合う、読み合う」といった双方向的なコミュニケーションを通して、様々な力を育成する可能性がある（図6参照）。

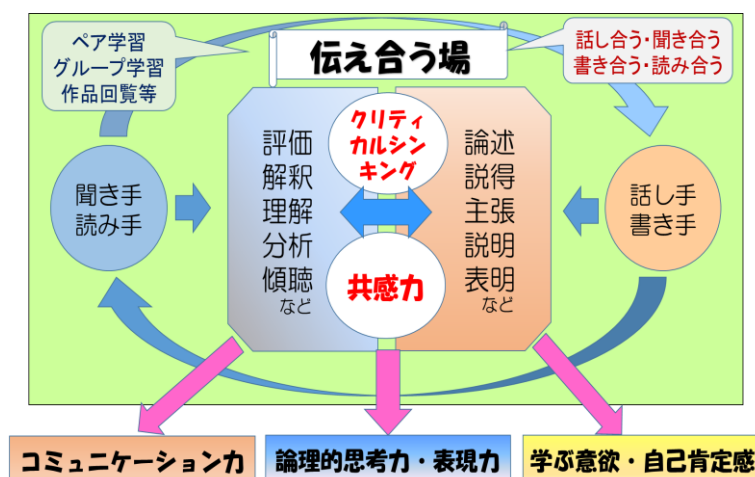


図6 「伝え合う場」における学習活動の概念図



教師が、ペア学習、グループ学習、作品回覧など言語活動のねらいに応じた適切な伝え合う場を設定し、表現の主体者と受容者が相補的に力を付けていくことができるようなプロセスを構築することができれば、「伝え合う場」は、効果的な「学びの場」になる。表現の主体者である「話し手・書き手」と受容者である「聞き手・読み手」は、伝え合う場の中で常に入れ替わることができる。互いの意見の共通点や相違点について、立場を変えて確認し合う中で、共感する力やクリティカルシンキングが醸成され、さらには、コミュニケーションへの意欲や相手から認められることによる自己肯定感を生み出していく。また、聞き手や読み手を直接的に意識した論述等は、実践的な論理的思考力・表現力を育成することにもつながる。

## (2) 伝え合う場を設定する上での留意点

### ① 指示や問いかけを工夫する

伝え合う場を活性化するには、教師の指示や問いかけの工夫が必要である。単に「話し合ってみよう」「読んでみよう」という指示だけではなく、「聞き手は、相手が話したことを要約した上で自分の見解を述べてみよう」「話し手は、〇〇について考えたことをその理由とともに説明してみよう。聞き手は同意できる点に触れた後、見解の異なる点について、その理由を述べよう。その後、意見を交換して、最後に統一した見解を百字以内でまとめよう。」「感想文を班内で回覧し、付箋に良かった点と改善点を簡潔に書いて批評してみよう」等、段取りを踏まえた具体的な問いかけが学習のねらいに応じて必要となるだろう。

### ② 積極的に議論をする雰囲気をつくる

伝え合う場では、相手の意見と同じ要素を確認し、共有することも大切だが、それだけでは、自己を省察し、新たな考え方やものの見方を生み出す場にはなりにくい。したがって、伝え合う場では、異なった意見や批判的見解を理性的・建設的に出し合える人間関係や場の雰囲気づくりが大切になる。個人の考えやものの見方は絶対的ではなく、他者の視点や力を借りることによって、よりよい考え方やものの見方が生まれてくるといった学びの本質が共有されていないと、気恥ずかしさや遠慮から率直な意見交換ができずに場が停滞したり、逆に、個人の意見や考え方の正当性ばかりを主張して場が硬直化したりする。教師は、相違する意見との出会いこそが「学び合い」の基盤であることを生徒に理解させることが必要である。また、立場を異にする見解を述べる際の、相手を尊重する態度や適切な言葉遣いを適切に指導するとともに、議論とは勝敗を競うものではなく、よりよい結論に向けた合意形成を図るためのプロセスであるという認識を持たせることが大切であろう。

### ③ 聞く側の指導を十分に行う

伝え合う場の活性化は、表現の主体者よりもむしろ受容者にかかっている。受容者の態度や反応は、表現者の意欲や能力を引き出す上で大きく影響する。傾聴の姿勢や的確な読解、共感の深さ、疑問点への質問や確かな論拠に基づく反論等、質の高い受容者の存在がなければ、場の活性化は望めない。したがって、伝え合う場における言語活動においては、聞き手や読み手への適切かつ十分な指導が必要である。

### ④ 進行の手順を明確化する

伝え合う場を活性化させる上で重要なことは、言語活動の流れを適切にコントロールすることである。教師は、必要に応じてペア学習やグループ学習における進行の方法や進行役の生徒の役割を明確に指示し、限られた時間の中で有効な活動ができるように指導することが大切である。話し合いの進め方については、場合に応じてファシリテーション的な方法を活用し、協働的な雰囲気の中で言語活動が進められていくように工夫することが望まれる。

### ⑤ 社会での実践的な伝え合う場を想定する

伝え合う場の設定としてはペア学習やグループ学習、作品回覧以外にも、ディベートやパネルディスカッション、ポスターセッション、模擬裁判員裁判や模擬記者会見、公開討論会など多様な形式が考えられる。社会人として必要な国語の基礎の育成が期待されている点からすると、生徒には多様な伝え合う場を体験させることによって、成熟した言語能力や場に応じたコミュニケーション力を身に付けさせたい。

## 5 終わりに

「教師がいかに教えるか」から「子どもたちがいかに学ぶか」へと授業の視点の転換が必要な今、言語活動は子どもたちが学びを深める重要な手立ての一つである。言語活動を取り入れた授業では、より緻密な教材研究と周到な授業計画、生徒の表現に即応した適切な評価や指導が必要となり、教師の力量はこれまで以上に試される。これからの時代の中で、子どもたちが「生きる力」を獲得する学びの場をつくるためには、説明と一問一答を中心とした授業の見直しを図りつつ、生徒の学びの質を上げていくような授業改善に取り組むことが高校の国語科の課題といえる。その一助として本稿を参考にさせていただくと幸いである。

平成24、25年度の調査研究では、西彼杵高校の白石愛子教諭、川棚高校の長瀬貴之教諭、長崎南高校の岡本裕加教諭、長崎北高校の酒井聡子教諭に「言語活動」の授業実践例の提供をいただいた。四人の先生方の御協力に深く感謝申し上げたい。いずれの実践も提案性や成果への期待がきわめて高く、当教育センターの「調査研究」Web ページに掲載している授業実践例を多くの皆様にぜひ御覧いただきたい。

【参考文献】

- ・ 文部科学省 (2010) 『高等学校学習指導要領解説 国語編』 教育出版
- ・ 文部科学省 (2008) 『中学校学習指導要領解説 国語編』 東洋館出版社
- ・ 文部科学省 (2008) 「中央教育審議会 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について (答申)」  
文部科学省 HP 〈[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/news/20080117.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/20080117.pdf)〉
- ・ 教員研修センター(2010) 「言語活動の充実を図る全体計画と授業の工夫」  
教員研修センターHP 〈 <http://www.nctd.go.jp/pdf1/gengokatsudou.pdf> 〉
- ・ 文部科学省 (2012) 「言語活動の充実に関する指導事例集 ～思考力, 判断力, 表現力等の育成に向けて～【高等学校版】」  
文部科学省 HP 〈[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/gengo/1322283.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/gengo/1322283.htm)〉
- ・ 国立教育政策研究所 教育課程センター (2012) 「評価規準の作成, 評価方法等の工夫改善のための参考資料 (高等学校 国語)」  
国立教育政策研究所 HP  
([http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/kou/01\\_kou\\_kokugo.pdf](http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/kou/01_kou_kokugo.pdf))
- ・ 田中宏幸(2012) 「言語活動の成立要件と指導上の工夫点」 田中宏幸・大滝一登編著『中学校・高等学校 言語活動を軸とした国語授業の改革10のキーワード』(三省堂)
- ・ 長崎県教育センター(2011・2012) 調査研究 『『書くこと』を中心にした言語活動 —中学校・高校国語科における学力向上のための授業改善』  
長崎県教育センターHP  
(<http://www.edu-c.pref.nagasaki.jp/cyouken/h22.web/a5/kenkyu.html>)